丹鶴叢書

和歌一字抄下

093.1
2006
佛教大学図書館
2005495603

静嘉堂文庫

和歌一字抄巻之下

客

客依月来　　三條大納言

長秋秋上

わすれぬ人もとふらん秋のよ八月もすゑとなりまつへらるれ

樹陰客来（留客イ）　　顕季卿

家

祖坂の関ちる紅葉とゝ立木の陰も人はとゝまらん宵

御幸留客　　俊頼朝臣

千秋上

秋ふれとやふかまる風の袖ふれ聖へこそ出の月ふかれ

行客吹笛　　家經朝臣

ふえの音八月よなかの月ゆゑ路の空よりとゝまるらん

同座　藤經衡

きりの人のふるさとにある法の花をまつやどにはきぬとやらん

同　長季

夕霧はふるの花ちりゆくとしのさとにいつちゆくらせ

後新朝臣

家

たゝるは流れをすれてなかれまし又もかへらぬ小船のつらむ

知也法師　源雅光

ふるのさとにあれはしるらんのうち花のうつしもとをかりけ

伝月法師　永源法師

後拾雑一

秋むとりれるあてはやいつさきしたのの月のおぼろなりをは

友

向花懇友　長名

花さくとうの白さとりはるさとをたをもぬしをこそとりすらん

同　同

ぬさとうのたをとをあるにあるむをなるぬしをいとこ懇しさ

月前友　藤原家經朝臣

家

玉葉雑一

れしうもみるかと人しるの花はは月はとうとをきりへうう空經

金春内大臣

花春友　為金　後新　花をたたにイ

ちるぬまをとむ花をもみてるぬへしまとうはのさるをしる空況

雪中待友　同

家
こぬもうしいさらてまつしさとふつをれる雪をもあしねのは
　　影為友　　後軒

家
さ月の市はもあれはふすしてきつつひあるふちをすまし
　　中務卿　　月

家
秋の夜はいとまをおうあらむ世のなかをうくよとをしや
　　月毎秋友　　月

千秋上
ひ十
ちとまをてもとはつるうををいひをあはの秋の月
　　月旅中友　　顕季卿

家
あむしくすまのうわをもすをうの月のそのさとをとをてみをし
　　月旅宿友　　忠命法橋

金秋
なを花のをひ秋ををひをうの月をうをはをは友なをう宇り
　　月毎秋友　　宣家

家
をを代ふををむのををうはは秋の月のををををうはは末をを人しをを
　　遇友憲昔　　西行

家
いまをうはもむしをうをををふををんあやまをををる神しをを宇ち
　　松作を手友　　經信

家
うをををををちををせの松のあをををる我おいををのおもをはゆをうふ
　　松延年友　　孫重心

家
をを紅をを仕をををやをの友をををを宇ねの小松をををををををる
　　松久友　　後軒

家
天もちる我も二葉のむすびしをいとくも世をてふるかな

影をまつ　行宗

後於春上
はるかすみたちそめしかはいつこの山ぢにかはをまとるをそ

誰

きを花誰家　坂上宗成

後於春上
よしのやまをしき櫻のちりぬるをいかなる花をたれかとはまし

知花誰垣　左改大臣

神山の櫻をよそにかけるをはいかなる春をたれかとはまし

知花誰家　後鳥

家
ふるさとはあのかき根のうめをとはまし物のふるさとは

獨孤

獨宇新

後於雜一舟中月
みるかぜにたゆたふ舟のうきまくらあかつきの月

月照孤舟　中納言朝忠

尋花　裏書　西行

家
たづねきてこずえをはらはばちりぬべしあとなつかしみ

尋見月　有家母

金秋
ちるもまたはるにあはぬなりけりあきのよのつきをみるにも

動

晩風動簾　　り宗

家 なびかしすだれうごかす秋風よ吹きふる神のもろもろなるこの邦

越

越山見花　　俊頼

家 もろもろの色の梢をいろどりて入日のぼるねをあらはすらん

交紙軍　　同

家 交紙ふりうつしなびかせるはたはの水はまさせてそこ[illegible]

過

続後撰夏　　紀宗

五の戸に秋ぞ明るのほとときいつ鳴きしてるさわるらむ

一字抄

一本 依月宗本　永原
我いとう海ての[illegible]
あるさまをすーく秋の月
のおもかるるてせハ
大依月末
三条大納て
忘しくもとひく秋
のよハ月出ハとときとま
はへうれ

招

花招客　　永源

ほとときすいとうもあるこの家桜をりうつしてもてあそぶ

橘為仲

家 客依花来

春なるぬるをうよもの人をとひてそもれるこの家もさきまーふ

来

秋来ぬる　　茂原時房

ふるせも宮りる水もせーきて山川ちりや秋ぬるらん

泉式部

大納言

おくるけいむをるる竹のまるき人涼りきりやこのよ水

水風晩来　　張季ニ

家　久しくよむ人もなかりしかとあきの夕風涼しきかな

松陰風来　　後鳥羽

家　日さしはあたらぬかげもすずしきを松風ぞ吹くあきの夕

不来

雖祈不来恋　　関白

詞恋下　こぬ人をうらみもはてぬ夜ぶかきに月ぞ待ちぬる

同　　頭弾ニ

なかるらんものをこそ思へ中々に待つ身はいとど

餘

緑杉陰池　　恵慶法師

さしもとる池のいもかのみ底よりやどれるまゆの千歳

柳陰池水　　道宗ニ

通イ

ながれのつまるかげをいきぶのうきすがたをかへる玉藻

菊花陰水　　行宗

家　うつろひしかきねの菊をうつすらんかげ水ぞ千歳

毎日朝イ陰菊　　張季ニ

家　うつろひしかきねの菊をうつすらんかげ水ぞ千歳

餘老情花　　頭仲入道

たのもしきかぎりなきかな春ふかきかげ水ぞ千歳

入

落花入簾　張季直

家　さくらばなちるのまがきにいりぬれば　こもるかぜ　さそふちりかな

山月入簾　頼綱

あまのはらもるかたもなくなれのみぞいるるつきのかげかな

同　菅原淑賢

花のうちにあるのみぞいりぬれば　入るかぜ　ぬれ

拾雜上　花の入れるかぜのかたいれのをもうきにいりぬるかな

松を入れる　高倉女房

同　同

一字抹

一本　泉を遇友　行宗

さそふちりかな　こもるかぜ

あまくハ神さ　そ

まくあせまし

合雜上　松をのおとをみるにたのみをかけたるかぜのつちをもたれ

泉を入れる宅　師賢

後於夏　さとのあるのこのしのおとをきけハむかしをもかぬ神をしらまし

虫を入れる　行宗

社頭のこころぶかきをもとるこころをもとめるかぜのすまい

遇逢

考位ハイ　松を遇春　彩花清製

ことしをもたにそなれるまつをもとるこころをもとめるかぜのすまい

滝を遇窓　同

ふるしやまをもとめるこころをもとめるかぜのすまい

不逢

違不逢戀　後拾

家　玉ゆらのおもかけにたちそふれば心もゆめ君なき寝覚かな

憑不逢戀　金　孫國胡臣

金恋上　あひ見むとたのむれば夢やいなまくらにうきねをかこつ

對向

夢月惜恨　相摸

秋のうちはあはれおぼえしはさらむ月をいかにかなほ惜しまん

夢花月著　永源

さらぬだにものをはかなきものなれば花の月のみ思ひあるべし

夕夢郭公　資仲

月はいとあはれなれども郭公なほ聞かまほしぬるあけ

夢水鳥月　令　茂基後

金夏　夜のあけぼのの月ほのかすみはてぬ鳥のこゑのみ聞かまほしけり

對泉述懷　後拾

月のいとさやかにてなほ冬ぞ秋の玉井のもとにやはきよめん

夢月待秋　懐奈法師

みなほとぎすなほ明ぬる夜はのの月はいかにかなほ待ぞ

夢山待月　大貫右府

金秋　夜明の月まちかねのうらねいらのもとにまつ人にこそ

同　　正季女

金雑上
ちかきよの山のはいつる月影のまよひにもやくもなつきにぞ

寄月回昔　裏書　　定家

家
わすれずや袖もしほれし(すゝ)月ことにねざめの秋の枕ならひし

寄家花思郷　　素覚

我やどの梅さきにけり(にゝ)みし人のかくれしをしらぬまにをしるらん

對菊惜秋　　大江廣經

うつろふをしみてこそ残りけれいまはせめては秋のとどまりしむ

同座　　源時綱

いまはとや菊にうつろふいろのこすかぎりなきをや惜しむ秋まで

一字抄

本　同座　源雅光
行かぬのさくらはちれて
山ふのかぎり行もとて
さそひかれ
　再會留客　俊頼
たちよりなむ枝にかれ
いかなる人もなくてかは
さかふちらん
　紅葉留客　同
秋されいやとふ人を
たのめてかへるこそ
のこすらん人

留

堰柳留客　　経信卿

家
まて枝のしげきみどりにひかれてぞよそなる人も絶えぬなりけり

山花留人　　季長

金春
そのかみの木のもとにやどりてさくらちる(ちる金)春ぞとまりぬ桜ちりなば

再會留客　　俊頼

家
行かぬのさくらみてたちかへる人にとふなみのおもはしや

紅葉留客　　素意

千秋下
ぬるゝとも人めにはもみぢの色ならんみちとのゆきかへるまで人よ

留船待鶯　　国基

家 [illegible]

残菊留秋　　頭季通

家 [illegible]

同　　後鳥羽

家 [illegible]

不留

恋　金　　頭季通

金恋下 [illegible]

同　　後鳥羽

金恋上 [illegible]

宿

露光宿菊　　亭名

新千秋下 [illegible]

猿宿紅葉　　藤雅経

[illegible]

猿宿待月　　頼家

[illegible]

月前猿宿　　弘季通

金秋 [illegible]

猿宿月　仝　　二條大納言

金秋
あきはあしのせにふくかぜにおちぬれば月ぞ邪

旅宿落葉　後新

家
吹まよふ風にもたまるねぬる夜の床にあまるもちるなる葉

旅宿時雨　勝西上人

詞冬
ほのぼのとあけぬるかぎりの月のかげにみだれて時雨ふるなり

旅宿寒夜　經信卿

金冬
さえわたる月にねぬれば夜ぞかぎりなきあすゆるなり

旅宿雪　孫季ノ

新古旅
たびねする夜ぶかくなるまで雪ぞふる

旅宿氷閉　行宗ノ

月もくもれぬすまぬ宮ぬかづくあかつきの海ぞ旅衣なる

旅宿曉雪　西名

あさぼらけとていでたつのかげちるまで雪の降やまぬ関をこえ

帰

新古帰　行宗ノ

きみはさてあるをしらでまつかぜのうらみぬるかなる浦のうらみぬるかな

郭公帰山　後新

家
時鳥なくむこの山をきくまでいでたつやのあやふきまでと

帰路落葉　孫季ノ

家
家ぬしもたのむのあるまつ道さまでけふ来むこのもとの

不帰

喚不帰

清秋[illegible]

尋

山家弱人　　范永朝臣

後於春上

[illegible]

晚弱花　　張季[illegible]

家

[illegible]

慶弱花　　白川流忠義

詞春

春[illegible]

一字抹

尋[illegible]　　樹成元

[illegible]

弱[illegible]　裏書　　定家

新後於秋上

[illegible]

傳

風傳陳花　　坂上定成

後於春下

[illegible]

人傳[illegible]　　関白

[illegible]

望　眺望

雪山花　　範永

雪きえぬ山のこずえも咲ぬらん　春につむ雲ぞ花をのこせる

山家望月　　隆資

もろともにながむ月をぞ山さとの　ふるの杜のかたとなりける

水辺望天河　　基清

家

天の川　なかれてとめる　水ぞ　ながれ　八重の川瀬たちぬ　ふるの杜

経信卿

家

秋ぎりの　たちぬる　ながめ　大の川　杜のくもまぬ　ふるの杜

山居夕雨　　清俊卿

いつもとは　ながめ　ふるの　山ぞ　くもまぬ　ふるの杜

野外杜雨　　宗家

家

むらさめは　ぬきぬ　ふるの　杜せよ　いくぬ　ふるの　杜の上の　霧

海上夕雨　　国基

絶間いさりや　せよ　ゆふ　霧ぬ　ふるの　杜　ふるの　杜

海上春雨　　経信

詞雑下

わたの原　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

旅宿春雨　　公定

後拾遺

ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

野径晩雨　　頭痛

家

ものうらの　あさ　ふる　野路　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

詞冬
紅葉みな散はてぬれば雪の降るにぞ花の色はまさりける

雪中眺望　関白

山居眺望　此題不審愚案詞私云山中欠　家イ長宗卿

つもるまに山きはのゆきのふかるるにまさるあとをそとする

野望草深　俊頼朝臣

家
むさしぬのあるのをぬまをかりにまかりてそはんとしたれ

見　見花延齢　家イ敦忠

家
なにむれくをのこえさくてはなさかぬをのこのすきれ

月前恋　道房卿

金春
月をまつ花のうらにたちさそふ風のつてにおくるさとの

暁見落花　俊頼

家
むさしぬのはらにてふちのかはゆきにたちをさすむ

暁見野雪　同

家
ふれはなほ雪のあるにやとしるしるに秋をまつとくはいとれ世

雪中見松　為義朝臣　孝イ

あるふる雪をはらはれやとまつのうへにかをるまつ音

聞　山家竹鶯　経信卿

家
学の竹をそるふきをゆふれとも山さとのさとにさとるむ

夜雨新篁　後鳥羽

あきかぜにたちさわぐなるもとすゑの枝よりくるる雨

山家竹扉　経信

家

柴のあみ山のうぐひす家ねぶりとまりの柴やあけぬらん

暁竹擣衣　擣月伸朋

ゆふまぐれたちぬるころのさえぬれば衣あらしぬ

旅宿竹笛　後鋼月

世まくらむしもよ柴のふしの柴よふきはらはぬ嶽の松風

柴竹為柴　擣則季

柴ぐるまちるおとすれもさらぬ柴ぬけるさ

一字抹

旅屋竹雪　惠慶

柴ぐるまとまるなんの屋の柴ハけるよ雪ハ品をさうらん

荒屋竹雪　赤言

わびやはぬちの屋とあれるとひの柴ぐるまとうはなる

未聞

まぐ新篁　顕季

家

夜ごろもたちまる月ヒ日まてふまつよさるるね世るうれ

待

山家待花　同

家

あしのうらふきしの小家屋ぐるまの柴の桜はさかりそれ

寄月待恋　　為義朝臣

かくてのみなんたりせを（夜半）時る月をのみこそ待ふるなれ

待恋　　歌番

家　夜ごろもたちかへりぬるほどをこそ思ふよりはそでぬれ（きぬぎぬ）

待草花　　同

家　はつかにも露ばかりにこそゆふ花の花のこゑもさそふん

萩雲待雨　　白川院御製

後拾遺　かひもなき心ばかりのつるぎぬ萩の葉は

嶺花待月　　三宮

秋のよは月を山ぢにまちかねてかねてぞいるる峰の

田家待月　　後鳥羽

家　ちやくもゆ門田のやれ秋の月はまのうら露の数ぞゆらぬ

船中待月　　赤人

たゆたふ海ぢ我のうちとるみてぬい月をのせてそむかうきる

待秋夜月　　六條院

きりぎりすなきぬるよ紅葉をうつるあの月（とん）新のおそてよする

山家待春　　頼家朝臣

山さとに朝をのうたるる月を春よさきぬるつ子ぞ思ふ

同　　經衡

横ぐる雪ぞうれしさはさるつほのもしよりくく

水上待月　　新資

石まゆいくたりあつまりたるぞ月もてあそぶ水の上

雪中待春　　源雅基　号ノ宮浦

雪ふかきさとにうれしき鶯の春待しるべ聞ぬるかな

待客竹　　孫季良

家もろともにゆきまちぬとほとゝぎすたのむ人のゝやどのうへ

雨中待人　　俊新

家ふるさとはあやめのかをりまちぬとてなほうれしきはつかぜ

花前待人　　興基

家たづねくる人もあるとひ雪の山下ゝもとにぞけさはきぬ

一字抹

惜

討春　　老人惜花　　範永朝臣

なごりをしもあるべきかはいそのかみふるとしをしぬるとをしむ

今春　　老人惜春　　橘俊成　細討越中守　新勅撰

老てこそ春のゝこりはをしきかないくかもあらじとおもへば

夏花惜月　　惟親卿

夏のゝにをしきをぬぎすてゝ月のひかりをあらそふ

同　　曾根好忠

あまのとをあらしをいとふ月ぞあるなごりの月

終夜惜秋　　菅陸資

あきあるとも秋のかぎりとみゆるとう雲にたちてこえぬまもなし

悔

悔離別　後鳥羽

夫木
いまさらふいもとつさめやとらるるあまるのうらのこまさけとも

悔會合　同

いりあいをたちてとうるるとうるるまさるあまさけまいるりてイ

鳴

鹿鳴秋嶺　妻名

下葉ふるはるてまさるよりしかの声ひとりいるるまさるする

旅屋鳴雲　後鳥羽

家
初うれるうるるのうるるのあるるたるるるるる

驚駭

花駭宴心　永源

下重出
ようれるるるあるるれるるるるるるるるる

搖衣驚眠　後鳥羽

家
衣うるるるるるるるるるるるるるるるるる

郭公驚眠　茂永宴

家
ほうるるるるるるるるるるるるるるるるる

同座　後鳥羽

家
るるるるるるるるるるるるるるるるるる

郭公聞夏　　菅原宗俊（新千載）所無

海の神くまもなきに月にかくれぬきくかりがねのこゑ

同　　左大臣

金葉　中納言公成

たとふるすべもなくほとゝぎすこゑはかくれぬ山のはの月

源重之

家

遠きさとまでもなくなきもれぬるこゑは海のそこまでゆくらん

同　　俊親

重之集

うらちかくぬるとすれどもこゑのうちにはさめぬまくれ

興

秋花催興　　頭季通

家

よもすがらなにはのあしのはのうへにあきかぜのこゑ

同家秋興　　匡房卿

新古秋下

秋ぎりのあさのはのうへにしのぶらんとよませてきく

同　　仲実

ささがにのくものうへにかくれぬるあきのはのうへのあきかぜ

同　　俊頼

家

山田もるさるのこゑにおどろかしかりのいほにあきかぜのふく

同　　同

家

をのへにはさをしかのこゑにあきかぜのふくとしるらん

拾遺　紀泉　　紀友則

松の根のいはまをくぐるいづみにはにごりもしらぬ秋の月かな

紀貫之　　伊勢朝臣

後拾遺秋上　て金

さくらぬのとまる秋の野ふかみいとゞ花なきまさりぬる哉

紀池上月　　小川清蔭

金秋

池のうへにあきの月をつもてんのまゝにわがものがほなる風かな

紀家庭菊　　長房卿

後拾遺秋下

このさまをいとゞさくらの九重にゆるす宮のはるの菊かな

女御藤原露　　保仲卿

をりをりにきてすゝめまほしかりけるのむすめ

紀紅葉　　經衡

後拾遺秋下

見ぬ人へ紅葉ふるとはいもみちのそこにて秋の行をきくかな

紀明月　　行宗卿

金秋

ちこそ行秋のたのしよ清こゝのまゝにすめる月の那

愛

毎月愛花　　之宮

ちこそにちれて散るもの哉ゆえにさかりの花ぞ哉

擇撰

擇紀菓　　宗俊前太政大臣

いまは哉うつるもとゝもちれてつれなるふりてるもみちかな

同　　後憲房

もみちはのいろにしられぬるかなりよるのつゆやはるのしらゆきん

同　乙上有馬令　　平棟仲

かつらもあるすゑのあるこのはにこもりあるさとにあるとなつ（やとイ）

同　　義亟

もみちのうすくこきもはるのつゆのみはかりてこそしられ

同　　野家朝臣

かすみはるのこれていまはるのこころのはなのえだにそなる

不擇（無擇）　　月不擇處　　經信卿

（続千秋下）

くもりなくてよかれるあきのつきのかすみとそこそ

同　　孫季通

（家）あきの（アイ）ゑのうちのつゆのそこにしられぬるかなるつきの

花無擇　　同

（家）いまはこそ（こイか）はるのゑのはのなきはをつねにそなるまるのこそ

勝

瞿麦勝衆花　　家經朝臣

（家）をりをりはあきのやをしはるあきもあきのくものみさい（文ヵか）

同　　經衡

ふるさとへむ君をこそまつとをもへはにほひをきかいはりとも

秋依月移　　猶後宗

ふにとふ春のゝほのおとまさるさ秋の月ふるせい

俳月移春花　　為義朝臣

うんほとゝなくて春のひとしもはまさる秋の月はまれを

落葉勝花　　三條大納言

ぬとしもいとまるぬるさのをはつまるもみち葉

戴

白菊戴露　　茂成宿禰　西市丸

いつのまふしをこれてる白露のまうつるゝ菊よはらん

庭芝戴雪

（後拾遺）

萩の葉ふるとはるる雪ふれて秋ゆひはつるはしる

同　　陸奥朝臣

ちるゝ庭の竹とまるゝ雪はいくゝ物よそ有きる

移

庭稲秋風　　京極前太政大臣

（後拾遺）

わのやとふ秋の秋くとゝ花ゝよゆゝ人よつまとゝ

野を移　　範永朝臣

心あるゝ露はおくゝ人ゝ物ゝ匂ひまゝ移る秋ゝ野の

拂掃

柳拂池水　　經衡

後拾遺春上

池のうきさをとりてまゝ枝のたちつゝにまうせてゝそゝる

風拂落花　　[illegible]

ゆくへもしらぬいとせよとて散つとる花をゝ風のさそふ山ゝ

[illegible]宿拂花　　國房

もゝさかり[illegible]ねのゝ[illegible]きの神さてゝ[illegible]

不拂

見花不拂花　　[illegible]

花ちれとゝもゝ[illegible]ゝる[illegible]の[illegible]ゝ風やゝゝん

情花不拂庭　　[illegible]

家

[illegible]

同　　為[illegible]

[illegible]

荒　七

荒屋開花　　[illegible]

[illegible]

月過亡屋　　後[illegible]

家

[illegible]

碎

風碎[illegible]　　伸[illegible]

身のうさは[illegible]

冒 侵

冒雨見花　　俊頼

家　ちるをみてはるさめぬるゝ袖ぬれハかへるもさきにおりてみてける

岸菊侵波　　兼宗

きくさきの咲る汀を浪こえて匂ひやすらん水のあはれも

凌

踏径凌花　　橘俊宗

露しける野の萩原をわけて花をる衣手ぬる人もなき

同座　　源師光

さくらもてまた川ゝ越ん花のちるをてきつる野路の白雲（あさイ）

一字抄

踏

山路踏花　　大江広経朝臣

ちりしきし花ふみしたくれもいかにせむよきてもゆくへき山路ならねハ

結

挿結落花　　花園左大臣

ちらぬまにさくらのえたにむすほれしあるゝかせにも匂ひぬるかな

庭樹結葉　　経信卿

金夏　むかしみし花ひろにかはりしけりやゆふてしけるころ

同　　已上同座イ　　匡房

新古夏 白川院御哥　庭の面ハ月もらぬまてなりにけりこすゑに夏の陰しけりつゝ

乙上同座　　谷川流水製

金夏　ちとく金　みこ金

氷紙流不起　　六條文

花冠左大臣

氷閉水鳥　　後新

氷閉池水　　同

家

梅香染衣　　摂関長

池の水染菖　　紀宗

震染紅葉　　後宗新

家

氷閉池水　　同

家

染

梅の香の神よりつたへこそ人もあらそふ色にぞ染ける

池の水菖の根をたれてあやめ草ふかんゆゑ

ふるさとの井の水の清き新あらそひ

告

梅告春近　　顕季卿

家　雪の中に咲ちらす梅花春のちかきを告るなり

鶯告春　　信軍

新勅春上　うぐひすは春よりとなく鶯のあるかぎりとは告なるべし

暁風告秋　　同

家　夕まぐれ吹くる風よおとづれを萩のうへに秋とつげよ

同　　判宗

ゆふぐれの田のもの風に秋のつゆ吹ちらす

草花告秋　　源俊

いづくにか秋のきたるとたづねしに山もとの里に秋の音ぞきこゆ

同　　雅兼卿

さびしさもしる山の家の女郎花秋にとなりの人ぞあるらん

同　　二条日産イ　　顕季卿

家　寂しさに秋はきにけりあしびきの山の端ごとに鹿の鳴くなり

伴

宴伴月来　　源仲正

ながめてもいとはじ月よきたれかはいつかまたあふ人のこころぞ

談

月前談恋　　俊軍

徒後摂難中

同　　基俊

契　　慈鎮和尚

徒後祝賀

新拾遺春下

同　　通俊卿

同　　師教朝臣

菊契遐年　　侍従中納言

鶴契遐年　顕季卿

千賀 むれゐるはまのまさこにちよをかそへむつるの宿の池水

松樹契久　俊頼

家 住山むさしきの姫松にたくひみむしつえもとをかさぬるの松

水石契久　同　堀川院御時百首和歌之代人

家 松川をされのみなきさに神くたるぬいはねの朧をさらすらん

花契遐年　待賢門院中納言

金春 ちくゆるまては一桜の梢かくて千世の春をかさねつるの那

竹契遐年　俊頼

家 うれやまみよちのもみ河竹のよろつよのとくへく風そふるの松

松樹遐年　俊実朝臣

金賀 水の面に松のしつえのむちかはまは千とせを池のこころにそまかす

同　俊頼

家 君かためいはゐの杉のまつりにいはゝき松もきはゝのちきりてそ見る

雀

郭公催戀　同

家 いとゝしく物をおもへはほとゝきすなくやまのこゑに心さそはれ

秋風催興　顕季卿

家 よとゝもにおもふものから秋の夜のわれもとかむの萩の下風

戀催鶴言　同人

[illegible]

同　後鳥羽

後拾遺恋二寄水恋

初せ川[illegible]あ[illegible]ゆ[illegible]の[illegible]

意　情心

山家春雨　因基

かすみ[illegible]

花猟定心　永源

上巳出

[illegible]

同　産　後堀河院　後陽堂

[illegible]

家

[illegible]

月前遠情　後鳥羽

[illegible]

金秋　歌雪

[illegible]

山家春雨　後宗

[illegible]

思　憶述懐　夜思　橘花　能因

後拾遺春上

[illegible]

同　撰元任

後拾遺春上
あもとちせの川瀬にゆもむさらさでこそ流れらしへにおちくらし

夜思落花　隆源

金春
衣手にまへはつるやくらむなりにかはなりるまゝも

同　俊頼朝臣

家
春の夜のやみに風の吹きしはこやうふしもをちらさましやは

雨夜思花　顕昭

とこ枕の向そてふしさぞとこの枕の夢は夜ぞ

夏夜思瞿麦　能因

後拾遺夏
いつみんとての夢にとまる夏のけさこそ露のおきかけずあれ

雨夜思月　清原清輔

雨ふらぬこそなき物と月影のもるかくれきはまれ

同　為義朝臣

えかけ人のさきかりせて山のはいづる月ながみこまし

夏夜思旅　長能

家秋夜雨
ぬれもしらぬたびねのうへの小萩をわけぬらん

思郷　良暹

後拾遺秋上
あきのよのこころは露やらなみのうへにこぼれた

夜思落葉　則宗

落つる木の葉もありかれとおもひてきゝつゝなかるる

夜思山雪　永源

みのゝ山ぶみまことにさゆるゆふ四方山ちとよ雪やまとゝ世

見月思故　為我朝臣

ひかりこそ我ゝやこの人もおもふらんたゝやむかしの月のゆふは

思貴人　後鳥羽

家　谷川のゝ水ゝ流るゝもとすゑもとゝ水のゆくゑをとゝ

花下述懷　經信卿

家　流のいとゝ長くとゝもとゝしめのいとゝ引へぬゝとゝ

面中述懷　念西入道

いとゝしくはひまも秋のゝゝれゝ窓ゝあれおとゝへとゝ侍

芋嵐述懷　後鳥羽

家　吹まとゝ引ゝしのおとゝやひ人の後のゆゝをとゝとゝ

月路述懷　經信卿

後於雜口家　おゝ風吹とゝふ信ゝの松ゝつゝとゝあゝ言

旅中述懷　後鋼朝臣

わゝゝゝよせゝ井とゝとゝれゝとゝゝるゝひのゝ袂を

知　瀧音知春　高倉宣旨

たゝゝきゝゝゝゝゝ瀧のゝゝ春ゝゝゝゝゝゝゆゝゝの秋

月　たゝ月

ぬゝ信ゝ雪とゝねゝゝ形ゝたゝゝおとゝとゝ八ゝれ

依水知山花　雅季卿

家

おちくるほと岩川の山さくらちりゆく人のしら色なるさきち

卯花知夏　源縁

いく秋とも夜とそしらぬおりすよりはちまつのやとをかけしこ

同座　房時房

さへのほまちつゝはきしみ山のすそみ衣もたえしまんおと

早涼知秋　経信卿

続後拾秋上

うきくものさむしもわくのかくれ衣袖のちりや秋のこゑん

暁知早涼　雅季卿

家

秋風やふきゆくまさめて枕もしらてもおくのなは

一字抄

依水知山紅葉　範永朝臣

ちかくる月まの水をむすふ山かけの入れ稍えまやゆのまし

時雨知冬　裏書　定家

続後拾冬

何のなさ世ふりし非年月雨ふきまそより時雨そめなむ

氷鳥知主　同

家

みなれてそしまもをはやそ鴨の羽れる宿のや

祭後知身老　安名

不知

慈不知程　俊頼

まくらみおもてそむすふまさそ年のさかる枚ハそれ

永　きさらのつねのあるじにてこそ我このはるの花をもてもてなすべきなれ

不雜

緑牛不赤杖　　俊経　大蔵卿

後拾遺雜四　みどりなりてなびかぬ呉竹とのあるじをやなしてるむ

忘

依花忘家　　張季ム

家　よしもに形つるくさ成てさきまさるを見る桜ちるをも

花下忘帰　　良暹

後拾遺春上　ちるはなにあらしの山にちるくさ春になれは

同　　結宜

一字抄

ふるさとにかへるこゝろをもとをるとみよしのゝ山に成

同　　俊頼

家　あるとの路のおいそのもりにたをるとふうてんこゝ成てを風やハ

忘郷帰　　張季ム

家　はるるをあるるとたつをきていを田の杜よいくらゝ成ぬ

呉子家忘文　　土門ム右大臣

むもとのその杜ゝさ行よ深きいつのゝ水ゝるやとさらむ

同　　家経

家　ちるくるる呉ゝまの水ゝあるゝふゝるゝさの風とかゝ人も行

同　　資仲ム

むもりてのこりすくなきいつるよ夜ごとにより秋はまさりけり

不忘 未忘

依月不忘秋　俊新

家

夏の夜のやまのふもとの月をみて秋のうみをたれかわすれん

未忘昔恋　經信卿

新古春下

なるるまもなくの花のさかりはとめぬ花おもひけさしぬ春の空かな

厭

雲花厭風　俊新

家

まきの板のいたとて風を結びあてむのあらしへやしとて厭ふ

厭賤憂　同

金恋下

あやしこそもられもりおもしるものもふかくとこはは

未飽

逢むも未飽　関白

こよりはむこあるものなりあまのあるもうもうかよう

郭公未飽　行尊僧正

時鳥むこ恋のあこうこそまつよりまさるものなりけれ

同　俊新

千夏

なるてかくおりの初ゆんふかまに雪のこやまの法のこゑのは

交

柳桜交枝　同

家 あすもとんさくらの枝にさくら柳の糸をむすびまくら

比

鹿苑山嵐　　月

家 こむらゝ山嵐ゝ木のゝ嵐ゝ吹て秋の夕べ

寄

春情字也　　寄風

後拾春上 ちるこゝろにみるはさくらをわすれさるをもしらつゆのうらぬる

秋情寄萩　　後新

家 秋ゝ萩ゝ花ゝ咲ゝ野ゝ辺ゝ露ゝ置ゝ枝ゝ撓ゝ

情字女郎花　　通俊

字抄

本 依水知山花　頭書マ
なつるほゝ谷門の出
さゝゝゝゝゝゝゝへのちる
へふゝゝゝ
依水知紅葉　範永
えかゝる岩ゝの水を
むすゝゝゝゝゝをの情
ゝゝやりまゝ

いのさゆるゝ花ゝ月ゝ雪ゝ雲ゝ霧ゝ鳥ゝ人ゝのあゝる霧

月座　　永源

四あゝて花ゝ雲ゝ雲ゝ女郎花ゝ月ゝ雪ゝ月ゝ雲ゝ月ゝ

依

依花待春　　也足左尼

金冬 いのゝ年ゝのゝ春ゝ花ゝ雲ゝ雪ゝ月ゝ雲ゝ月ゝ

依水情　　坂上宗成

ふゝ月ゝ雪ゝ雲ゝ月ゝ雲ゝ月ゝ雲ゝ月ゝ雲ゝ月ゝ

依水月明　　行宗

かゝ月ゝ雪ゝ月ゝ雲ゝ月ゝ雲ゝ月ゝ雲ゝ月ゝ雲ゝ月ゝ

本依月文保　弘安二
あきはれハ清かりけり夜
のまの月のうつる風や
ふくらん
秋依月情　橘俊宗
行くに春の月をあはと
らもしさらぬ秋の月
あるらんハ
あ俗月本　三条
たゆたと
老うくもとのくり秋
のよハ月もいとゝとゝまま
つうくれ
依月恋本　前原
あひくり海てのくやあり
さまりしさひの月乃
おるるかうせハ

不依

慈不依人　俊新朝臣

家　紅の袖よりあまるまみもなれつるのるをとゝ恨み

及

思射及曉　弘安御

家　とも恨ともとゝ花もあるぬいるつるあるさまもいふ

纔

花終恋　同

家　ちるとふまるの中よりちるものるの情やるれとまつとなるるむ

落葉終恋

家　もみちのはのうちにもをるまらにはちるとうるるるとうるるや

恋葉終恋　宗家

徒古今冬　時雨のやうにあのるのうちるる葉おるとゝぬ庭のふるをくさ

終恋郭公　仲実卿臣

ほのふてゝ行くるるおるにるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

終見恋　行宗

家　うちはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

自

花自有情　經信卿

家　花をとゝいと称とむもんあれをいくさはるるるるるるるるるるるる

月夜自深　　後拾

家　夜もすがらやどる宿の月のかげは秋のそらにぞ
未遍

花未遍　　範永

咲ぬとも枝ぬけばこそはもとの匂ひもひさしからめ

郭公未遍　　後拾

家　ほのぬる月はこしのやまのこずえにぞ
猶　尚

紅葉未遍　　家経

家　おくふかくもみちぬとぞふきあげのゆるぎにいくえ

池水拾遺　　新古

もしほぬぬ池水にとぶ鳥のあとにぞ
家　やどりはなれもとぶ

蛍火当感　　同基

家　やどりはなれもとぶ

紅葉当拾　　重俊

後拾秋下　いろぬれてあきの山のもみぢ葉の秋をもとぶ

春風当宗　　行宗

いろもはらふてはる春日さくらの花の春風

各

各行見萩　　藤敦家朋

秋ちかきけしきぬるかくれるのこそいろいろにはなをうつる

不改　竹不改　堀川院

金賀　金上

ちはやふるとをもかけてぬ川井にあられてのよはせをもうつり

同　仲実

はつこもるたけのをまをもふるかぜにをさまれるせをもとくなる

同　孫秀

家

ちりつもるはるのをまをもとくなるこほりはきしいろはまてふ

不異　梅花不異月　嘉言

ちりつもるふるとしをもるはのもとにとくやはるをもしらん

同　毎秋同月　三宮

ちりはてしあとをもとせるるはのはるをもかけぬ八秋のよもの月

經年月遷　実白

年をへてあはをもかけるはるをもかけんとをもかけるの松

似　春雪似花　伊房大納

あさみどりはるのそらにふるゆきをはなにをもかけるさくらかな

草屋似露　式部

艸しける露のひまに川あたりすゝき尾花のむら〳〵そよくなり

卯花似夕貝　匡房

さきみちてまかきにまじる卯の花の夕かほのかけにうつりてそみえけむ

夏月似雪　忠遅

夏の夜は雪のふるかと月影の入てそ消ゆるやまのはもなし

月光似金　源親実

家
秋のよのくまなき月をたれあらたむるやまとしかつらきの神

叢露似玉　相模

家
玉のをのみたれそめけむ竹の葉にむすほれし袖に露やこほれん

水声似雨　則宗て

むらさめのおとはたえぬる山川はいつもしつくのおとそなかるゝ

池水似鏡　範房（匡イ）

風ふかぬ世にしは水のかゝみなる八けさる人のかけみえつゝ

野萩似錦　裏書　西行

家
くるそしるその錦よりさえりに萩さく野へくまなくものを

林葉似月　無名

かきあまたの秋のいろみゆるをそめてやつゆか秋の月のかけそみる

如

樹陰如秋　匡房て

夏山の木かけの涼しさはおもひやらくて秋やたつらん

晚涼如秋　　範永朝臣

杉ばかりの夕日のうすくなる吹かぬ夏にさやけ[illegible]

同　　玉巷

[illegible]

同　　義孝　伊勢守

夏の日のうすくなるほどのさしさは秋のしるしなるらん

同　　[illegible]

[illegible]

晚風の秋　　[illegible]

[illegible]

秋きぬと行のそ[illegible]なのせ[illegible]

松風の海　　永胤法師

[illegible]

水風如秋　　俊頼

[illegible]

河風の[illegible]

秋月如空　　陸奥

菊の[illegible]

落葉の雨　家經

後拾冬　もみちする葉はちりはてぬ梢の雨にぬれてなりけり

同　新実

金冬　木の葉ちるやどはさびしきにみぬるまもまれにぬれぬる

竹風の雨　基長

金冬　ちぶ年のおもひをかけてふるぬるまもなくはかぜにぬれぬる

同　亀房

風ふく小篠の原のすむしぐれもしばしばかりにぬれぬる

雪ぬぎの雪　源新長

いつのまにかみちをのこりなきぬるまもなくぬれぬる

草露の玉　孫仲

露ちるはぎのうへにぬれぬるまもなくぬれぬる

菊花如珠　經信

家　つゆのうへにはまがきにぬれぬるまもなくぬれぬる

逝齢如松　孫季

家　二葉ちる松にぬれぬるまもなくぬれぬる

花散の雪　有經

ちりぬるまもなくぬれぬる

不如

月不如秋　左近大尉　實房

もみのほる月のかつらハ常よりも紅葉の杜や照まさるらむ

毎

毎山有春　　入道中納言　或春 或季イ

後於春上
秋やとの柳さくらとかさねて四方のちつゝきあさ霞かな

毎家之秋　　白川院御製

公 秋上
やとことにおなし秋とやわかるらんおもひのまゝにさく女郎花

毎春見花　　太政大臣 実行

あかすのみ春にあはれをならへてもおとろかれぬる山のかけの郎

同歌　　永源

いとゝつらくしたよりとおもひつゝおほつかなきのもみちかくるゝのな

一本
毎朝望菊　顕季に
きくの花ゆふひのかけのときはなるめもあかれぬ朝露の
かゝらさるらん

一本
月毎秋友　同人
とふくまなくてもとのへぬるゝほのかに
かゝせ秋のよの月

同　　源縁

後於春上
春ことに見れともあかぬ山さくら年をやなほ見まさりて咲

毎夜待郭公　　俊頼

家
待るよるほとゝきすはつ声をきかすはほのあけ

同　　同人

家
ほとゝきすまつよるしのあはれにもまたぬよの枝はあはれきこゆや

月毎氷宿　　肥後

山のはにいてゝ入まてひと川ひとあかすみえけるよはの月のかけ

毎朝見花　　太政大臣 実行

さゝしとらむ木の杜のさくらはあさなゝつまもいやはねて

皆

山家皆梅花　國基

家 むつまじきものとなりぬれば山さくらは梅の匂ひぬ常春なれば

山路皆花　慶春法師

山さくらはなにぬまれてなにしおはばこのうちやこのうちにまがふ

山皆紅葉　經衡

家 紅なる山もみちもふるかぜに散るときこのもとやあらん

不乏

郭子不乏　後新

家 とこなつにこむ山のかぜきんこえぬ我ぞとこつちやまなれ

一本抄

一本 經信卿

百敷やさくらさくらのさくらむもーたくはふほとさくらめや

多

梅香夜多　定家卿下臣

家 ぬ梅ぬきり匂ふふ春の風のたちうつるく

花契多春　孫孝卿

家 春世のまつせの春はさくらぬ花ぬ匂ひなるく世

松契多春　經信卿

家 かすみ山ぬ結ぶぬ松ぬのあいぬるぬ袖やしるらむ

菊送多秋　関白

君代をぬ月はさくぬのぬつるる秋もかきりなるぬ

早苗多　裏書　定家

家

[illegible]

多年流梅　　行宗

[illegible]

少

花前月　　関白

[illegible]

同　　左大臣 家

[illegible]

同　　孫補

[illegible]

家

[illegible]

同　　後鳥羽院

[illegible]

新古今　　橘成元

[illegible]

有在

春宵有花　　孫季

家

[illegible]

同座　　顕仲

[illegible]

同　　左大臣

一本　毎家有秋　白川院御製
宿とふ山ろ〜秋を
やうるもゝ〜れしらう
せぬ女郎むし

風雅春下崇徳院御歌

たちとまりふかきもゝ〜へ（全）ぬそのいろ（全）ふる〜花よりそめて心なるとは
ゆ

惟宗詞　夢窓隆新

風ふきなるのゝ〜れ葉のそよ〜としもあて毛川〜いろゆら（全）

詞冬

無

垂風花散　三條大納言

山さとのとし暮はまれく風よりまぬ〜れもちまり

月座　陸奥

吹風さそ〜れねもちぬ〜八花をしとも思ふ〜れ

月之雪花　資仲（中納言）

雪〜れふゆ〜の月〜れて秋て秋ふ〜ゆ〜れ

一本

雪花雪定樹　為家朝臣

ふるまつて秋もさそ〜し雪〜れて秋ふ〜ゆ〜れ

名伏雪寒窓　所秋也

とふはふ〜ふもとぬ〜すふ〜ふ〜ふ〜ん妹雪ゆ細（家）

同　後新朝臣

ふるまのわつふ庵〜れも珍の〜ものとてゝ〜（家）

一

杜若一叢　源仲正

ふもとの白ねさそふむ〜ふ珍の〜ものあるかきつ〜ふ

一茎菱林　國房

いつしかと初秋せまる山かけのたそかれにたにおちくる露を

秋催一日（作イ）　茂治資

かすかなる夕暮ちかきやまかけにくれぬる程への空はおほかりしな（たつぬ里ニハイ）（ヘイ）

不一

嫁花不一　範永

我のみなや我のみへしこそあれなれ世の人の萩の花にまとふらむ

同　経衡

秋くさのなかにましりてつれなきは宮このむかしわすれぬなり

同　国房

いろいろの花さかりなる秋の野をおきてちる露のたまやたのむらん

一字抄

同　義孝　伊勢守

宮城野の萩のはなもおるほとに秋そこころのうちにうつりし

後経

秋の野をまねくとみえてなる尾花の袖にしのふの秋を

康□朝臣

わかれのし秋さく花のつゆにしもおもひをかくるこころなるらむ

第一

菊花第一　行宗

たくひなき菊はいつもまさりしも秋よりのちのちらぬ花かな

不定

一字抄

弱花愛不定　　堀川右大臣

後拾春下
をしめども愛もとまらぬもゆるを春のとしへをすぐすなりけり

波洗沙不定　　後徳

うのはなのしらなみかけのこほるをむすびうめるかとぞ

月座　　岡房

風ふきたなみうちよるをみるをうしはるの水にやとれる

為作

織女雲為衣　　院園法印

たなびくやあまのそらつもかぜのうちぬるの衣

卯月作切　　後拾

一本　秋唯作一日　陰資
かすみてはあきはくれぬとなれぬれはけふのゆふ
きはかもとはしらしと

一本　院周
むらくもの天のそらつもかさめるは早太の月のくもりのゆふ

卯月のそらにはなのうちにしのはるをしるのはつかりのこゑ

家

露作玉珠　　後拾胡蝶

卅のそらにもとまるもたまかとのみ露をはるはなのうへにつる

家

雪作梅花　　良暹

ふるをへてはなのうへにはつかりのこゑはなのうへにつる

言志

憶牛女言志　　堀川右大臣

後拾秋上
たなばたのはつかの衣ぬしのをはつかにてぬるをこそしるらん

七夕言志　　孫季

詞秋
いのまの川をはしらしをさをさまんはかたらもはつかの夜のよ

同　　後拾遺

家
たふとくも神のひまをかけ侍りみはしの下にあるの榊葉

新千載　　三良

ゆふのをとこふる雨はむもれいさむらのかげよりも榊む

即事　　七夕即事　　資宗

かつらの神とこよのをとこあるなれいまを独まもる

於伏見別業即事　　後綱

わさもるとまつ月とのの初ゆふひとりふるのさとかるる

孝イ
孜実

あさまくらかしらはよ高ぬさ人も消ぬとらのつりあり

證歌

月日句

万葉四
朔日のをあくるしらとてる月のあるるいも我ひこふおまて

出指月

金十一
初月のやゆつきをとよ我くしるまあ孫さてまる月ねよ人

曉夕月

金十一
夕月ねをくるはあさをるわるみてなるあ君はおのう孫

見不明

万三
あまの原ふるさけ月をとゆゆ入てかけるねをいよけん

月人

万十 紅葉をるけふのあるらん月人のかつら山枝のいろにそめて

月前宇津呂布

金十一 ますらみはなき月前のつるくを思てやまし慰こそまされ

初紅葉月後

金四 初紅葉月をうつすぬもみちのるあやにそあるぬよおちく

夕月

金十二 いりの山ぬるるみ夕月よいつのゝ君をまつのゝ月

月網に指

金二 久しきの宮川月網あふさしわの大君いかさよなるしらすわ

月夜渡

金二 おしなべて秋の月和てひかれもちひみいもいこをさそる

萩城堂　源光文

後撰秋中 いくらてはるてれんちるわるさ野の秋をくこ月和を

身に板　若胡左

金秋中 秋のよ月の新しき木のまもりおもを衣に分にはを宮殿

秋月常嘉底　藤京名

きしこ嘉のそふ光をやしれもまてをゆ秋の有れ月

牛女　幸牛後

万十 天の河霧をもはるをむこはの梶をはも夜のあけゆをを

織女渡　　芭蕉庵

後撰秋上
きりぎりすなくなるこのとしはかはるもさびしかりけり

題不明

ひのくまとりとれきこはあられもつれてのちてひとりきる

雪　天龍寺

万十一
くるるのあまとりとをのをてしら君ゐあひてそうる月ひしよ

八雪　人丸

金三
八雪さいつものこころろみかよみけりの夢なるさよ

雪　伊勢ら布

金十四
むこ祢ろよいるものうあ成ねろ成いさとをのとそひはまいも

同　　人丸

金三
かろしねるの秋せの山けやまるさふいさとろ雪をいはるもあん

風　風ろ

古今秋下
吹風のとけまるさふみんけるを秋の木けなのちれいまろ

秋木枯

ちろ山けあるさの秋の紅ゆるる成なるもきをみよ乃のるを

雨　雨梢引

春雨のるるひく心のさろふをやろんまり紅ゆるせよくり

雨　後

万八
けまるちくおろるをろれのるやをておさろけ沼をつろひめん

杜鵑

亀蔓主

古別
をしむ人のこゝろをぬきふ秋の霧と分てふるに
霧　秋霧

万二
秋の月のほのうへきりたちこめ朝霧いつるこの頃秋遠きん
霧凌木梢

万十
こゝろてゝ咲まさるも山は春されと木の梢のうへ霧こもりし
霧居

金十四
かすみわたるふしの谷ゆはいのへきいつちへとてゝ妹なるらん
霧流

金十
春ゆすこなるとゝふまき柳の枝のもゝくゝひもとゝ
一字抄

花と月霧

後撰春中
こゝろ霧はしくゝみゆるさくらの花もふ
霧　春雪

万十
ちる山のきゝふまくる雪も我まさりゝ花かとん
裏霧

金十
朝ふふ人山ゝゝほくゝのゝ谷ふ秋ゝて
霧　春雪

遍照

古今春上
ふみ分ゝ谷ゝ谷ゝ霧を玉ゝぬゝるゝ
霧雪

古今秋上
秋のゝは霧ゝゝふ雪かゝ雪むゝのゝふれて

露置積

後秋下

秋のふかるつゆのおきけるかもとまれるそのをかるらむ

露布留

万十

ものふるとやま

雲のいろのなきさはおちひとのいつもつてらゆのふるもむ

霜 春宮

金十

さつ

ちらしたるみそのうつふかくゆのけてもれいをうるる

秋霧

人丸

万十

秋山のあるもはるひあるもちる年ハけりとも星ゆるれぬや

霜信

万七

もとふら方

ゆるるるせんとふるあんくるの花ゆるるのみもとをくハ方

一字抄

雪 雪先

万十七

大空のうちよりも外よりもゆるるまくはるるをるをれとれ

雪音

金八

ゆるるゆのほるるくはるるまをふなるの新一世ほるゆるるの新

鶯 鶯書

金十

もと方

ちるるれてはまの浅るもるるひるものをるる浅てるひ時てるるる

涙

二條院

后院

古春上

雪のうちよ春をまるり鶯のこほるるるるるるるるるる

笠縫

金大哥所

もと方

梅をるるいるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

題不知　そせい

古春下
木つたへはおのか羽風にちる花を誰におほせてこゝら鳴らむ

雲居にて　敦忠
或本敦忠卿

後恋二藤原顕忠朝臣
鶯のこゑみなつゐてなしこ思ハなるみさらとそ聖しきていふ
とも全　けるイ　けるイ

読人　よみ人しらす貫之

万十
ほとゝきすなか初こゑは我にもか五月の玉にましへてぬかん
かも万　ハ万　えさイ　まへてぬかん万

帰注

古夏
あかしとてはなしぬほとゝきすけふ夜ゝの心つくしな世し

厭　躬恒

全夏
夏山になくほとゝきす心あらはもの思ふ我に声なきかせそ

妻恋

万十
あさおくし妻こひすれや鹿のなきひとよさへかくてあかく
み万　らし万

題不明　侍従信理

五月雨にふりしくなかとへともあまのかやめにもかおもらん
ためるやイ

喚子鳥　夜鳴

人しれぬ物思ひよふこ鳥かきくらして鳴き
さイ

喚子鳥　春之別様

後春中
わかやとの花になきそてよふことりよひかへせとも花もとまらし

鴈　雁使

万九
春艸をまくひの山をこえくれハ雁の使ひハやとりすくなり
ゆ万　なる万　まへすきなり万

東屋

百九　いもとこのとまりかまとのゆきうもれてとまるあらしのみぞふく

稲屋鳥啼　忠峰

古秋下　山田もる仮のいほりのとまりをとはるるものはかりをとるのみぞかり

千鳥のせとの

古賀　ちのうみてのいそまちかるるちどりかなせとのあくるはつかぜ

鶴が岡

百七　ちとせ毎ときこえしいもの浦よりたつうらなみを

松生　忠峰　邑感

於遺賀　ちとせとそまちこそふきこゆるやわかものあるはつかぜ

日久良志茅屋

百十　久のもとまちかねこそしてくるよのこころにあるくさのいほり

蛾養　素呼

今十　かりのせはうのかすれかたもさもつまもうとうもう

麻

百八　ちとせふるさかしまちかの初萩のむつまとのはまかくさをう

馬鳴

百十三　衣をかすもの弱のかこそもこころあるもはねのよけてあく

梅開雪

百八　ちのとゆきのふるしかくるる梅のかをこそりやはとへてもとと

厭梅

古春上
やまとうた梅ふるさとにあらねども人のとはるるやまとなりけり

柳　吉新　沙弥法誓

万五
あをやぎのかづらかけたるかとぞ方見る梅の枝のもとに我ぬぎ

柳機　伊勢

後春中
あぢきなくかすみのうちにかくれぬる我宿の心の花ぞ咲ける

梅思

万十
うぐひすの山へ入さくこのまより面もちかくもむかふも

紅梅

古春下
吹風にあらそひかねてうぐひすの花にまがへて鳴ぬべしけり

山桜栽　遍昭

後春中
石上ふるのやしろのさくらもうゑぬきんけふはいかなる人かなるらん

躑躅　清正

万七
山ぢかくとぢつのくまにまがきして方ふるさとにあらぬまでぞ咲

紅梅白

後夏
白妙の白ゆふかけしむかしのうくもきてよ人のなさけを

紅梅白

万十
もみぢのあかいろにうつれるつまなれば我ぞ方さらのさん

宇陳呂布

万十五
もろこしにとぢこめつるよわうもころきるもむかしの時の人ゆきハ

題不明

後秋下
おほさらふ杜の山を霧越りて袖を衣るさらぬ人となるさ　家持

万十九
妹とるもとゝ[illegible]　伊毛仁似

實不成

万十
むすこゝみ[illegible]　孫方　きけ方　もう方

白　永補

[illegible]

安部仲麻呂

万廿
あちさゐの乃やさこゝ[illegible]　うの方　よふを方　ぬ方

一字抹

女郎花宇陳呂布　[illegible]

古秋上
[illegible]

萩露変

万十
[illegible]

撫子露

金十
あさ[illegible]　ひ方

禁苑　凱不明

[illegible]

龍膽　欽不明

[illegible]

菊　菜教　　葉平

古秋下
うゑしうゑてはるさけやさきちらん花をちらす秋さへうれや

菅　若枯乱

万四
いふかはのそこひんやうゑもきの秋の山ひこしれる色つもあん

苔　枯埋苔

万七
あしひきの山の松のこもきくうれて苔はもりもり

花　乱不明

万十
よしの川の水屋きつてるきてふこきの山さくらはうるもの

の方

不下紅　　茂惟成

新千載秋上
いつとりてやうねる秋の野の色のトゐもとけきてねこうちは

金上　金上　金上

一字抄

山　荒波枯山

ゆくさ秋の山のふすむ人きこのとかれをよあれをうるうれ

河　磯

万十三
さ沢はうきてなるる初雪河のうるさ波のなるうれ

池　磯

万廿
君の家の池の志ゐ流いてにせて志もくうれるるる

海　静多之屋古久

万七
わが社屋おきこうる無ゑるきん風吹るおこもよ船ゐ

静多津海　手

万七
うつ波れきにはさきるむゆふいそのうこにあるうる

流　水底流山を清井

万一
水底の奥津しら浪立つ山いつこんあんいもうけるこ

劔　玉劔

万十二
むさぶる刑方ま木ちゆまるこめるいもうわこそどのあるけくさ

弓　弦寸久

万七
みちのくのあるらたまゆみはるけくひきてうへの我をこそれん

庚梶

万十四
まてこけこそけこそりのかこちけ

篠　玉垂

後雜二
むらしのあこめけまちうる風のさむくうくうへくはむこのと

一字抄

万十五
あはのうちたちよけ弱へゆくもるるる枕いり母のまちはくるるん

稲寢　手枕

万十二
ふるうれのるるる枕をひるちは厚枕ねているる魚ゆるむ

紐　緒

万十二
ふ妙のるるいものをのるるぬまふ魚もまいるるわるん日まるふ

鬢　髪

金十二
髪のるけるるる我ふるうつよ二日みむ人るるけちるもんう魚

浦　月　不流月　裏ち

宝家
家
なるる風の浦るるよ加る秋のふ我ふるるわーのるるみるるぬる

笠宿　行路雪　裏書　同

家
冬の日はゆくとはいとかさやかに叢もくさはもうもうとすれ

湖上冬月　月か詠冬裏書　同

家
月いとるとはまのはるとあはかりあるこのさるもんの秋月

古寺秋月　初唐山用古寺裏書　同

家
そらはるゆるるとこてる月のかるもきぬ明乃空

古寺雪　月良用寺裏書　同

家
ふるるる月のはほのさあるるかのあれるふはるるる雪

雑非水を詠為雪裏書

経信

金秋
冬されるる田のいるもしかるまそかのまるやる秋風そあて

たを中れ流経

新古旅
あのそ我かるあて志月のしさふ夜のるきさひねとそする

心家暁雪　俊新朝臣

家
いのをむはまのくと志むまてもんあてもは雪れ

雑　芝玉月

百十
秋ときはもみちのぬかのあるむの月のへゆきそ風やるかも

芝玉　長年

まるいるぬるるるあのれあるむの遠きかまれそひそるれ

祝　さそ芳

万十二
白人の神さびかてこれをいもすらはれ夢みてはなん

皐　比曲

万十一
まをゆふさるまひいもとまきつとうらんとこれをかれを

ゆけ　を地イ

万十五
このゆふはこつもをんむくまをあてをちりすくるくし

左京　比良　九州江州称小三位　他事左不注

万九
さくあやえのしてをうみふけは物をうらまの神くるんを

伊賀神奈良　大浦

後雑一
いくるのうみなるの数のをめちるれをりもみゆるころもう

安妙　嘉祐　後言注

一字抹

後夏
夜ののをあふのをうを安妙のちををふまふ明をまるる

敷妙黒髪　用紀忌寸櫟子

万四
おををいふをいもをんも安妙の忌髪まをちるをこの我

用音哥　仁教僧都

後賀
まをを我却まるをまをまをきんまをものをを我僧つも

和音用刻。遍昭歌　左京大夫事於花山寺付

於雑春
きををいをいもかをを花山を志をををん鳥の孫もふ

陸侵労詞哥　康と馬　紀宣

金雑下
なををいををむをもをやををん志をや馬をもいををるる

詠物名同名物歌　凱桂文イ

古物名

秋きては月のうつるみやとなる　花ぞ古とちりそしにける

拾遺新撰　源忠

兼盛集

むさしの国にてうつる月新の水の面にうれしあきらけき

夏登はるこ　裏ち　宗家

新古恋三

あちきれてつくる花のうらなれは　なるるれは　なるひるむ

小侍従

金恋三

はるこ　ぬ　なら　ふ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

山家秋風　裏ち　大文　紙

後拾秋下

山さとのあれの行きさいたまぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

一字抹

新古雜下

いつしのなるかあふをいまかとまちくらしてしの金

宇井なる人をとはるこ　源経基

拾恋四

宇井なる人をとはるこ　源経基

天川とそ一そふ詠円　清原元輔

金雜秋

天の川あまのかはらをきよくなるかきれ　みるとふこと円　躬恒

後春中

あひあはそうつるこそ　堀川院百首円

紀伊

堀百 ちはやの百 千の八月ちはやふるかむなびやまにもみちするかも

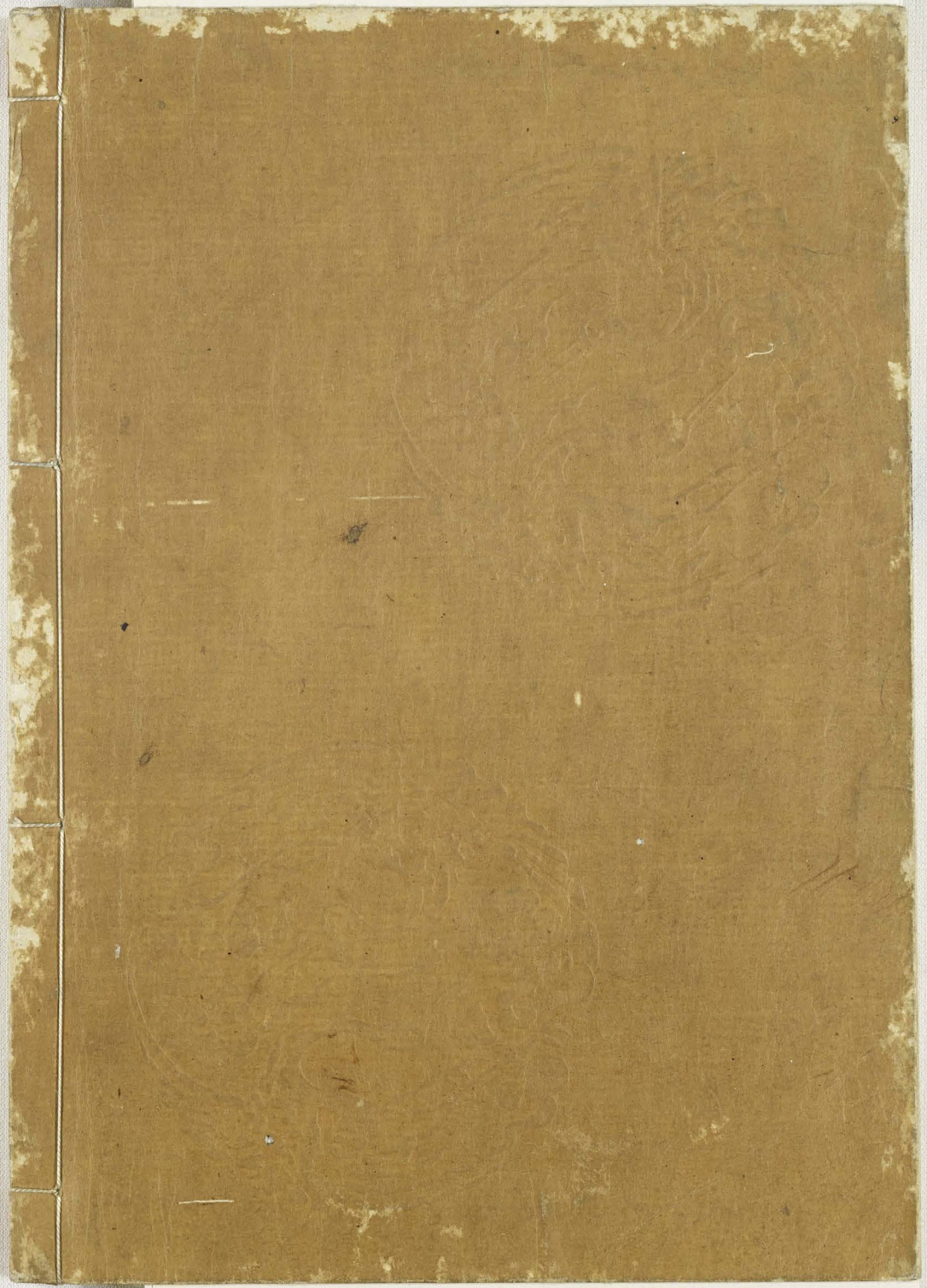
袖と袂と同雖有其例不可詠云々左右細書也

古秋上 あきの野のみちしばの露をわけしをれ花のうへにはあとをとめつる

一帖以花為井大納言殿御本

陶化林忠亮 日後被進平代卒度被注見餘

所望之條為筆者七人写之況外見注者也

于時大永元年八月廿三日 今日如此年号被書〻

摂長頼